

# ソーシャル・ワークの価値体系

## On Value System of Social Work

秋 山 薊 二

Keiji Akiyama

### 1. 序

ソーシャル・ワークは人々の社会的ニーズに答える為の専門職であり実践である (Siporin, 1975)。従ってソーシャル・ワークはその専門性の故に多様な知識と理論を持つ反面、その実践に於ては人間が対象となると云う必然性を持つ。

この人間を対象とした社会的ニーズの実践にあたっては、何らかの究極的方向性もしくは道徳上の意義といった目的概念や価値体系が前提とならざるを得ない事は自明である。

日本における社会福祉の近代化は戦後になって実現し、アメリカで成熟したソーシャル・ワークを導入しそれまで不毛であった実践方法を補強し、科学的な社会福祉の進歩をみたと云っても過言ではない (重田, 1971)。

アメリカのソーシャル・ワークは制度の改革志向よりも社会環境に個人や集団を適応させる調整技術に重点が置かれている事は良く知られた所である。この背景はアメリカ特有の個人主義, 自由主義, 民主主義, プラグマティズムを伝統にした社会的, 文化的, 歴史的土壌によるものであろう (Friedlander, 1958)。

此の異なった土壌で進歩発展したソーシャル・ワークが日本の特殊性を考慮せずに原型移入された事は幾多の問題を残している。特に政策論と技術論の分化はその代表である (重田, 1971)。しかし戦後わが国には自由, 平等, 基本的人権を基本的価値とした民主憲法が制定され国民の生存権の保障が国家の責務となった。従って基本的人権にかかわる保護, 援助は国民の権利として社会的に承認されていると同時に此の自由, 平等, 基本的人権養護の社会的要請はソーシャル・ワークの実践的方法, ソーシャル・ワークの価値体系の形成に深くかかわらざるを得なくなっている。現在の日本に於けるソーシャル・ワークの方法論 (技術論) に関する研究は多いが, その背景となるソーシャル・ワークの価値に関する研究は極めて少ない。ソーシャル・ワークの実践を支える価値観の研究はその方向と目的を定める為に極めて重要である。拙稿は, 歴史的, 文化的, 社会的背景は異なるが, 日本と同じ民主主義を基礎としたアメリカン・ソーシャル・ワークの基本的価値観がいかなるものであるかを考察しつつ体系づける事を主たる目的としている。それはソーシ

ャル・ワークの原理がソーシャル・ワーク自体の持つ価値体系に依拠していると考えられるからである。

## 2. ソーシャル・ワークに於ける価値の意義

一般に価値観は社会の制度、方向性、組織構造などに多大な影響を持つと同時に社会に生存する人々の生活、仕事全般にかかわるすべての行為を支配するものである。更に価値観は社会構造や人間の人格構造にまで深く根をおろしている。この人格や社会構造の構成要素である価値の理解なく、ソーシャル・ワーカーはクライアントおよび彼等の持つ問題を正しく評価し処遇してゆくのは極めてむずかしいであろう。Hamilton は軽視されがちなソーシャル・ワークに於ける価値の重要性について次の様に述べている。

「各々のクライアントは文化的環境を集合的に踏襲するか、組み入れている。だからどんな処遇目標も文化的に形成された価値判断である。文化的パターンは人間の満足や自己表現の量と形態に影響を及ぼす。あらゆる処遇目標が我々ワーカーの価値体系によって影響されている事を忘却する事は何んと容易な事であろうか。」(Hamilton, 1958 p.xi) <日本語訳筆者>

扱、このような重要な要素である価値とは如何なるものであろうか。辞書の定義に依ると「何か本質的に貴重なもの、もしくは好ましいもの。」(Webster, 1973) <日本語訳筆者>である。Gordon (1965, p. 33) は「何かを価値づけると云う事はそれを好んで選択する事である。」 <日本語訳筆者>と云っている。すなわち価値とは人間の行為を生み出す源になるものである。更に Williams (1967, p. 23) は「価値とは好みや選択にあたっての選択的処理として、もしくは予定行動の正当化として用いられる望ましい形態の概念作用である。」 <日本語訳筆者>と云っている。又 Pumphry (1959, p. 23) は価値を次の様に定義している。「価値とは、時に強い感情の伴ったある種の生活状態、目的、方法、に対する通常の好みを意味する。価値に内在する意味は、価値を持った個人がしばしば私的犠牲や価値を維持する為に懸命な作業へとかりたてる情緒的特性である。」 <日本語訳筆者>この様に価値とは人の好む概念作用であり、人の好む結果であり、人の行為の動因であり、人を扱う為の好ましい手段などであろう。換言すれば、人間がその職業、友人、文化、社会のかかわりの中で行動を起し、実践を行なう上で取捨選択をする以上、いかなる人間も価値を保有する必然性を持っているのである。当然、個人の集合体である家族、社会集団、

社会組織も又その置かれた環境によって様々な価値を保有する事になる。この様な状況下においてソーシャル・ワークが人間と社会のかかわりの中で存立している以上、ソーシャル・ワークは自ずからその価値を保有しなければならないし、又ソーシャル・ワークに携わるワーカーも社会の構成員として必然的に価値を保有している。

所で、ソーシャル・ワークの定義は幾多の先駆者によって作成されているが、ソーシャル・ワーク教育カリキュラム研究協議会 (The Council on Social Work Education Curriculum Study) の為に作成され、良く知られた Bohem の定義によると、「ソーシャル・ワークとは、人間と社会の相互作用を構成している社会的諸関係に重点をおいた諸活動をする事によって、個人（個別のまたは集団の中での）のもっている社会的機能の内容を高めようとする事である。これらの諸活動は三つの機能に分類する事が出来る。それは 1) 損傷を負った能力の回復、2) 個人的資源と社会的資源の確保、3) 社会的機能悪化の予防である。」(Bohem, 1958, p. 18 in ワインバーガー, 1972, p. 24) <高沢武司訳>となる。この定義は明らかに人間とその環境の間の不均衡、もしくは人間と社会の相互関係にソーシャル・ワークが介入する事に焦点が当てられている。それは更に、この業務を担うワーカーは、人間とその環境（人的環境を含む）に介入し、援助と処遇の方向と目標を定めるにあたって単なる知識、技術、科学性に対する盲従であってはならない。だから、それらを支え、もしくは正当性と説得力を持たせる価値の存在が重要になる。Bohem はこの点を次の様に指摘している。「ソーシャル・ワーカーは社会的領域に於ける基本的な人間的要求の充足にかかわっている。このかかわり方は、ソーシャル・ワークの最終的目標というよりも、むしろ目的に対する手段として見るべきものである。この立場は次の様な考え方を基礎においている。すなわち、基本的な人間の要求の充足は、人間の尊厳を獲得する為の基本的な条件の一つであり、個人の自己実現にとって欠く事の出来ない基盤をなしているという事であって、ここに目標をおく事は、ソーシャル・ワークでも他の専門職業でも同じである。基本的な人間の要求の現われ方、および生き方の内容は、文化的な背景に条件づけられる。そうしたものは社会の違い、時代の違い、社会内部での集団の違いで多様であろう。」(Bohem, 1958, p. 36 in ワインバーガー, 1977, p. 13) <高沢訳>

この様に人間の尊厳を守る為に人間の基本的ニードを満たしてゆく所に専門職、特にソーシャル・ワークの価値の意義がある。しかし同時に Bohem も指摘する様に、その現われ方は文化的、社会的背景によって多様性や差異を表わしている。この事は価値そのものも社会化し、社会の流れとのかかわりを欠落させて価値の存在の意義はない事にもなる。すなわち、ソーシャル・ワークは人間存在の社会的意義にかかわっていると云える。

更にソーシャル・ワークの実践は継続的相互行為である、社会と社会生活を構成する集

---

\* 高沢の訳には明らかな誤訳があるので、その部分は筆者が訂正した。

団や社会組織との結びつきの中にある人間の概念作用を基礎にする必要がある。結局、ソーシャル・ワーク自身もその価値と伴に社会化の過程の中に存在しているのである。

所で社会化とはどう云う現実であろうか。Young の定義に依ると「個人が社会秩序の中で自己の立場を教示される為の相互行為の過程である。」(in Goldstein, 1974, p. 88) <日本語訳筆>と云う事である。換言すれば、社会化とは人間が自己の帰属する社会集団や相互行動を持つ集団の習慣(行動様式, 規範, 態度, 価値観等)を習得する方法である。この様にトータルな型での相互影響関係を意味する社会化はそこにかかわる個人のみならず、集団, 組織, も社会化の対象となるであろう。勿論ソーシャル・ワークも例外ではない。ソーシャル・ワークに於ける社会化の過程を短絡すれば、価値化と価値づけに結びつく様に思われる。ソーシャル・ワークの技術, 知識, 実践をどの様に評価し又評価されるかと云う事に到るからである。それはソーシャル・ワーカー個人の自己満足や自己理解であってはならない。社会的に評価され理解されるもの, クライアントによって理解され満足されるものでなければならぬ。それはクライアントの価値もしくは社会的価値とがソーシャル・ワークの価値が整合性を持つ事を示している。何故なら前述した様に価値が人の情熱や願望や動機を喚起しクライアントを満足の感覚に到らしめるからである。

ソーシャル・ワーカーとクライアントの関係で更に考察してみよう。ソーシャル・ワークはしばしば歴史的にクライアントの自己決定の原理を重視する余り、ワーカーの個人的価値表現を禁ずる「無価値アプローチ」(Value-free approach) がソーシャル・ワークの理想的モデルとして用いられた。(Gouldner, 1962)

しかしこの無価値アプローチの根底にはクライアントの人間の尊厳を重ずる価値観、もしくは中立であると云う理念が流れているのであって、無価値アプローチ自身も一つの価値体系の表現であると同時に多様な価値に対応する一つの方法でもある。ヤングハズバンドはこの点を次の様に述べている。「ソーシャル・ワークは画一化に向って歩を進めているのではない。むしろ生活の様式が多種多様であることは可能であり、有用でもある。それだからこそ各個人は彼の問題に対する彼独特の解決策を持ち、彼なりの均衡をつくりあげる生活様式を見出すことであろうと信じるのである。この多様性が各個人の創造力に対して多大のひらめきを与えるのは勿論の事、われわれのすべての生活を豊かにするものであると信じるゆえに、事実私達はこの多様性を大いに歓迎するのである。その故に、私達はケース・ワークを通じてクライアントが私達のやり方をまねるのでなく、彼自身の生活のあり方を見出す様に一人一人を自由に解放させる道を探し求めるのである。」(ヤングハズバンド, 1975, p. 35)。

一方、ワーカーとクライアントの間に真実の意味ある応答が存在するとすれば、それは互の持つ多様な価値の表現、交換が行なわれているからである。いかなる人間関係に於て

も価値表現、交換がないとするならば、それは極めて粗雑な無意味な人間関係になるであろう事は誰も経験的に知っている。ワーカーはクライアントの価値観を理解し、ワーカー自身の価値を表現する事によって相互に価値の交換、もしくは移入が行なわれる様に努めなければならないであろう。又、ワーカーとクライアントの関係（ラ・ポール）が継続するかどうかは、両者に共通の価値の象徴が存在するかどうかに依る。それは人間関係が共通の興味、趣味、言語、信条、によって継続するのと同じ事である。ソーシャル・ワーカーは一般の人々と同様価値を持った個人である。だから、ワーカーは個人として他者との付き合い、物事の重要な選択に於て、実質的趣向、価値を選択している事になる。むしろ、このような極めて当然な事が、人間としてのワーカーのスタイルを特徴づけ、予知しうる行動を持たせるのである。すなわち、ソーシャル・ワーク自体もワーカー同様定化した信念、信条、恐らく偏見さえも持っているのである。これらの信条、信念が直接ワーカーの業務の上に表われる事がなくとも、クライアントの価値観に対する理解、認識、反応として表われるであろうし、クライアント自身の価値感覚に深い影響を及ぼす事になるであろう。更に重要なのはワーカーがクライアントとの相互行為の中で表現する様々な習慣や様式がクライアントの中に導入されて行くと言う事実である。これはワーカーが一人の人間として作用している事以外の何にもものでもない。

以上の様にソーシャル・ワークの価値はその実践の倫理性を含むものであると同時に、その社会的使命の倫理性の基準となるものである。従って、ソーシャル・ワーカーは社会状況の中で価値づけを行う一人であり同時に価値づけられる存在なのである。この事はソーシャル・ワークの価値はそれ自体の存在を意味づけ、意味づけられるものであると云う事であり、価値体系こそがソーシャル・ワークの中心的核になるのである。

### 3. 価値の葛藤

前述のごとく、ソーシャル・ワークの価値体系はソーシャル・ワークの実践上欠く事の出来ない重要な役割を持っている。それらは、問題を持つ人々に介入し援助するワーカーの実践効果に多大な影響を与える原点でもあり、同時にワーカー自身の仕事や経験の意義と願望をもたらす源でもある。しかし価値は単に包括的、無秩序的存在ではない。Pumphrey (1959) が指摘する如く、価値には各々用いられる状況に応じたレベルが存在する事を忘れてはならない。彼はそれを抽象的価値、中間的価値、実践的価値の3つに分類している (Pumphrey 1959 in Siporin p.66)。我々自由主義社会に生きる者は、民主主義、自由、平和、平等、自主、社会進歩発展等の抽象的価値に異議を唱える者はいないである

う、又同様に Pumphrey の云う中間的価値、すなわち良き家族、発展と前進のある集団、良き地域社会、問題のない人間、等に不賛成を唱える者もないであろう。しかしこれらの価値が具体的にどの様に表現され、実践されるかは別の問題である。それは良い政治、良い組織、良い人間とは何かと云う事になるからである。この事は、個人によって保持する価値やイメージ、経験によって異なった形態で表われるからであろう。我々は日常生活の中でこの様な葛藤をしばしば体験している。平等と云う社会的理念の中で差別を強いられている人々、法による正義を唱える社会の中での汚職の数々、この様な例には枚挙のいとまがない。扱、ソーシャル・ワークはこの様な現実社会に積極的に関与してゆく事であるので、上述した様な所謂、理念的価値だけではその業務の遂行は不可能である。更に、Pumphrey の云う実践的価値の中でも実は価値は相互に対立する場合もある。例えば、ソーシャル・ワーク実践の基礎的価値といわれる自己決定の原理 (Reid, 1972) について考察してみよう。自己決定は確かに個人の尊厳と自由を価値とした実践上の価値原理であるが、もし援助を必要とするクライアントがワーカーに解決を求め、その解決方法が唯一しか存在しない場合、クライアントの自己決定 (選択) の余地は全く存在しない事になる。更に我々の文化の中では専門職の専門性は権威の形で具体化している。例えば、医者にかかる患者に通常治療方法の選択権が与えられているであろうか。ソーシャル・ワークに於てもワーカーの権威が用いられるのは例外ではない。特に、矯正、P. S. W. の分野に於ては顕著に表われる。クライアントの自己決定と専門職のコントロールの葛藤の問題であるこの点について P. S. W. の分野から Dumont (1968) は次の様に述べている。

「心理療法の中で最も破壊的な事は治療者の持つ救済の幻想である。すなわち、治療者は苦悩と逆境の淵から患者の苦悶する心を引き上げ幸福と栄光の道へと引き戻す神の担い手であるとの感情を持っている事である。この幻想が破壊的である主たる理由は、患者は唯一治療者によってのみ救われると云う信念が存在しているからである。この様な信念が患者に伝わると、患者は反逆するか、治療をやめるか、もしくは更に無力になり依存度を高め病を重くする以外に選択の道は残されなくなるのである。」(Dumnt, 1968, p.60)

<日本語訳筆者>

この様に善意と情熱に満ちたワーカーはしばしばより良い結果を求めて、本来のソーシャル・ワークの価値を逸脱する事がある。しかし一方では、経験豊かなワーカーは、クライアントの自己決定を重んずる余り、問題を解決出来ずに苦しむ、特にクライアント自身が主たる問題解決者である事を理解させるのに多大な時間と労力を費さなければならないのである。この自己決定の原理と専門職に依るコントロールの価値のジレンマの解決は恐らく、クライアントとワーカーの深い意志の疎通以外にあるまい。クライアントにワーカーの立場と機能を認識させる事である。特に援助と保護の本質的差異、もしワーカーが権

威を与えられている場合にはその理由と範囲、更にワーカーの限界をもクライアントに知らしめる事であろう。この様な深い相互のコミュニケーションこそが価値のジレンマを解決するであろう。このクライアントの自己決定と専門職によるコントロールの葛藤は一つの例にすぎない。McLeod と Meyer (1967) はソーシャル・ワークに共通する価値がどのような型で支持されるか価値テストを行ない経験ある専門的ワーカーと、非専門的ワーカーとの価値観の違いを調査している。この結果は恐らくソーシャル・ワークの内部に存在する価値の対立、もしくは葛藤と云う事になろう。McLeod, と Meyer もこれらを対立概念としてとらえている。それらは次の様なものである。

個人の尊厳	⇔	組織の目的
個人の自由	⇔	社会的抑制
集団の責任	⇔	個人の責任
安心感, 満足	⇔	苦悩と拒絶
<del>相対主義</del>		<del>絶対主義</del>
相対主義 プラグマティズム	⇔	絶対主義 神聖
改革, 変化	⇔	伝統主義
多様性(理念, 生活様式)	⇔	同質性
相互依存	⇔	個的自律
文化的決定論	⇔	遺伝的決定論

(McLeod & Meyer, 1967, pp. 402~403) <日本語訳筆者>

これらに Wilensky (1965) が福祉の概念で述べる制度的概念と補充的概念も加える事が出来るであろう。この Wilensky の概念の相克点は福祉とは正常な社会機能が崩壊する時にのみ用いられるべきであるとする理念（補充的概念）と福祉サービスは社会の中の第一線の機能であるとする理念（制度的概念）の相違である。

この二つの価値の相克はどの程度ソーシャル・ワークがサービスを提供すべきであるかと云う基本的問題にかかわって来る。この相克する価値を含め、上述した様々な個的価値がソーシャル・ワーク内部で実際葛藤しているのである。これらの葛藤は決して容易に解決されるものではないが、自己決定と専門職コントロールの所で述べた様に、相互の深い、誠意あるコミュニケーションが解決の大きなキーポイントになるであろう。更に Bowers (1967) が強く主張した“共にある事 (Both-and)”の理念がソーシャル・ワークの価値葛藤を超越させる重要なポイントになるであろう。

この理念の土台となる Pinker (1971) の考察は次の様なものであった。「社会の福祉制

度は情熱と無関心，他愛とエゴの不安定な妥協を象徴している……福祉制度は又個人の自由と社会的制御の妥協を代表している。社会福祉の伝統は人間が自己尊重の性質を持っているにもかかわらず，他愛の積極的表現である。これは人間の欲望の一部に実際より高潔であろうとする願望があるか，そうでなければ道徳の混乱による悪化を回避しようとする願望があるのであろう。」(Pinker, 1971, pp. 211~212) <日本語訳筆者>

この事は一見批判的に受けとめられようが，福祉の実体の認識に深い造詣を示している。それは，個人の価値，社会の価値，相反する価値が，相互作用もしくは相互依存関係にある事を認識しているからである。従って，社会自体，人間自身，実は自己矛盾を持つ存在であり，この認識の上に立って，その矛盾，葛藤，ジレンマを許容しているのが現実であると帰結できる。前述の自己決定の例を上げれば，相反する理念，専門職によるコントロールはどちらが良いか，どちらが優先するかと云う様な二分化の問題ではない。自己決定は社会的責任，社会的貢献を必要とすると見做されるべきであり，その為には専門職のコントロールも加えられなければならない。単一の実践的，もしくは抽象的価値は一方的に尊重されるべきでなく，相反する価値と止揚されなければならないのである。即ち，一つの価値は相反する価値のバランスの中で存在するのである。故に Biestek (1967) が主張する様に，個人の満足は社会共通の良き事に貢献しなければならないと云う理念を導くのである。

この様に相克し矛盾する価値を保有している社会，集団，個人，とのかかわりの中で，ソーシャル・ワーカーは状況把握をしながら，バランスを取りつつ，自身の価値の相克をも超越してゆかなければならないのである。

#### 4. 価値のヒエラルキー

価値が個人や集団の生活様式に深くかかわっている事はすでに述べた。生活様式が極めて多様化した現代社会にあって価値の多様化，価値の相克は必然的帰結であるかも知れない。ソーシャル・ワークが個々人の社会的，個人的満足を充足させる専門的サービス (Fieldlander, 1958) であろうとする以上，ソーシャル・ワークも又多様な価値の中に身を浸さなければならないであろう。しかも，前章で述べた如く，多様な価値は同時に葛藤している。この様なソーシャル・ワークの価値をどの様に把握整合するかが問題になる。

この点を松原 (1979) は，アメリカン・ソーシャル・ワークの価値を一般社会の価値体系，ヒューマンサービス専門職 (医師，弁護士等) の価値体系，ソーシャルワークの価値体系の三つに分類している。更に松原はソーシャル・ワークとヒューマンサービス専門職

の価値体系を一般社会の価値体系の下位文化 (subculture) として捉えている。この下位文化であるソーシャル・ワークの価値体系とヒューマンサービス専門職の価値体系は相互に共通領域を持ち、これを倫理綱領と松原は名づけている。ソーシャル・ワーク価値体系の一部は社会価値体系より一部逸脱しており、それを社会改革、理想主義と松原は呼んでいる。この松原の価値体系の概念理解には次の様な問題点がある。

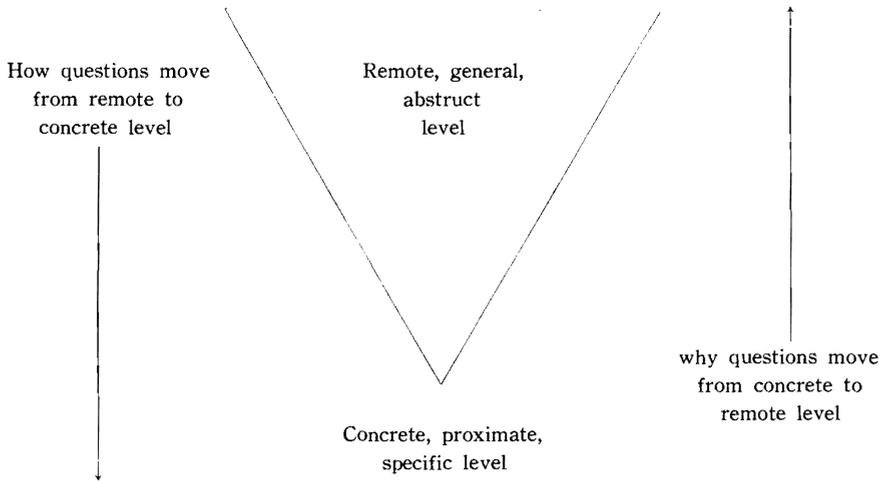
1. ソーシャルワーク・ヒューマンサービス専門職の価値体系が何故社会価値体系の下位文化なのであろうか。むしろ、専門職の価値体系が社会価値体系に影響を及ぼす事がしばしば考えられる。例えば、専門技術や知識が、社会価値としての社会制度を造り出す場合もある。即ち専門職の価値体系が社会価値の上部に位置すると見做す事も充分可能なのである。
2. ソーシャル・ワークとヒューマンサービス専門職の共通部分が倫理綱領になり得るとは考えにくい。勿論、共通の倫理は存在するが、それは人間を扱うと云う共通基盤に依るもので、単なる同質性でしかない。例えば、N. A. S. W. の倫理綱領 (Code of Ethics) の第一は次の様なものである。「私は社会条件の改善を含め、個人と集団の福祉を第一義的義務と見做します。」(N. A. S. W., 1967) <日本語訳筆者>  
医師や弁護士にとって、社会条件の改善、個人や集団の利益を慮る事が第一義的義務になり得るであろうか。むしろこの倫理綱領は松原が挙げたソーシャル・ワークの価値、社会改革、理想主義に近いものである。
3. 最後に、社会価値の下位文化であるソーシャル・ワークの価値、ヒューマンサービス専門職の価値のいずれもが重複しない社会価値とは一体何んであろうか。ソーシャル・ワークは社会との深いかかわりの中に存在する所にその意義があるのであって、社会価値と重複しないソーシャル・ワークの価値があるとすれば、それはソーシャル・ワークの社会的孤立に至るのではないだろうか。

以上三点が松原の価値体系理解の問題点となるであろう。繰り返すが、ソーシャル・ワークは社会とそこに生きる人間とのかかわりの中で存在するのであって、社会的価値と重複しないソーシャル・ワークの価値など理論的に存在してはならないのではなかろうか。この様な平面的、もしくは平面的価値体系よりも、垂直的価値体系の整合が必要である。何故なら価値は各々それが用いられる状況に応じてレベルが存在する様に思われるからである。

Compton (1975) はこの点を極めて巧に表現している。彼の用いた図式は次の様なものである。

---

\* 第57回日本社会福祉学会に於ける口頭発表とそのレジメによるので解釈に不十分な所もあるかも知れない。



Principles :

1. Agreement about values increases with remoteness.
2. It is important to know the level of abstractiois when values are discussed.
3. The challenge to social work is to apply remote value concepts in concrete situations.

(Compton, 1975, p. 105)

この逆三角形図の上部は間接的，一般的，抽象的な価値を表わしており，下部に移動する事によって価値はより実質的，具体的，且つ特定なものへと変化してゆくのである。

例えば，ソーシャル・ワークの実践に於ては先ず抽象的価値（人間愛，個人の尊厳等）を取り入れてこの価値が特定の状況の中で応用される。

図の左右にある矢印は，ワーカーの「如何に行うか？」とは抽象から具象への移動であり，「何故その様な事を？」とは逆に具象から抽象への価値移動である事を示している。特に下部から上部への移動はワーカーの行為，行動の正当化や説明の根拠となるであろう。

この Compton の考察は極めて一般的，総括的であるが，ソーシャル・ワークの価値体系にヒエラルキーが存在する事を示唆している。

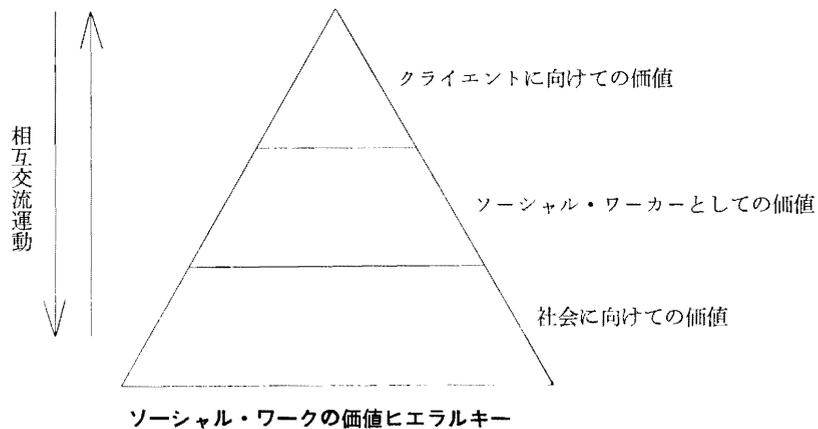
更に Rokeach (1968) は個々人は社会の中で何が要求され，裁定されるかの重点に従って，生活を変化させ，それによって価値のヒエラルキーの学習すると述べている。実際ある種の価値は儀礼的であり，またある種の価値は即現実の対処機能となる実質的な作業上の価値もある。この様にソーシャル・ワークの価値にはレベル，もしくはヒエラルキーが存在する。これを手がかりに，様々に語られるソーシャル・ワークの価値はヒエラルキー形式の中で理解，把握されるべきであろうと思われる。この概念に近い理解を示しているのは Lowenberg (1977) である。彼は一般的価値を社会的価値，集团的価値，個人的価値の三種に分類し一種のヒエラルキー的発想によって理解している。Lowenberg (1977) はこの三種の異なった価値構成によるヒエラルキーが価値の葛藤を生む源であると指摘している。

Lowenberg によると、社会的価値とは最も多くの人々によって受け入れられ、一般化された価値である。例えばアメリカに於ける“成功”などがその代表であろう。しかしこの一般化した価値も集団によってその理解は異なってくる (Lowenberg, 1977, pp. 34~37)。この点について Parsons (1960) は次の様な主張をしている。「あらゆる下位組織は組織自体の価値を持ち、これが一般的な価値体系と異なった、もしくは特定の視野を導き出すのである。」(Parsons, 1960, p. 193) <日本語訳筆者>。これは大人の価値観と若者の価値観の相違が生む葛藤を極めて明確な形で説明する。社会には多様な集団が存在し各々異なった価値体系を持っている。アメリカに於ける、中産階級 (middle-class) と労働者階級 (working-class) はそのよい例であろう。Kohn (1963) の調査によれば、上述の二つの階級の持つ価値の違いは育児方法に表われる。前者が自立 (autonomy)、自己決定を重視するが、後者は規則、指導に忠実に従う事を重視する価値の具体的相違を発見している。

最後の個人の価値であるが、これは個人が良し悪しを判断する基礎となるものである。この個人の価値は時に、社会、集団、の価値体系とは全く関係なく表われる事もあるであろうし、又個人自身は悪しき事と解っていて表出する場合もあるであろう。この様に一般的価値を、社会—集団—個人のヒエラルキ的理解を基礎にするならば、ソーシャル・ワークの価値も又この様な理解が事実可能になる。ソーシャル・ワークがクライアントの社会的、個人的満足を満たそうとする専門的サービスである以上、先ず社会に向けた価値を持たなければならないであろう。即ち、制度、社会的慣行、政治、文化に向けられる価値である。これは人間が尊重され、個人の尊厳が守られる様な、社会、制度、文化、政治を造り出す価値である。具体的には人間愛、より良い社会を形成しようとする改革の価値である。この様な価値が常に社会に問い掛け、社会制度の改革へとソーシャル・ワークがそのイニシアティブを取ってゆく基礎になるのである。

次に考慮すべきものは、専門職ソーシャル・ワークに携るワーカーとしての価値である。これは社会に向けた価値が基礎となって形成されるべきもので、ソーシャル・ワークを維持してゆく上に必須なものとしての価値である。具体的には、前章で述べたバランスを考察する価値、共存 (both-and) 的価値、他愛的価値、人間に間断なく興味を示すコミットメントの価値、等であろう。これらの価値はソーシャル・ワーカーが人間 (クライアントを含め) とかかわる時、ソーシャル・ワークの技術、知識が用いられる時、その根底に流れていなければならないものである。ソーシャル・ワークの実践が機械的で、対処的で、人間性を欠く様な結果を生まない為の価値である。これはソーシャル・ワーカーが専門職としての自覚の中で持たなければならない価値でなければならない。ワーカーの中にこれらの価値が存在する時、ソーシャル・ワーク自体が社会的に、文化的に意義を持つであろうし、専門的知識、技術が更に生かされる事になる。

最後に考えられるのがワーカーのクライアントに対する価値である。ワーカーがクライアントを援助しクライアントの自立をめざす過程の中でどの様にクライアントに接し、より良いワーカーとクライアントとの人間関係を樹立、維持するかである。この範疇に含まれる価値は具体的には、自己決定（否審判的態度）、クライアント参画の尊重、個人の尊厳、受容、合理性、自己尊重、等である。これは具体的にクライアントに接する過程で用いられるものであって、ソーシャル・ワークの作業上の価値と見做す事が出来る。ワーカーが専門職としてクライアントに信頼され、効果的で、且つ人間的充足を導き出す為の前提になるであろう。以上の様にソーシャル・ワークには内部に三つの異なったレベルの価値によって構成されたヒエラルキーが存在し上部から下部へ下部から上部へと移動を繰り返すダイナミックな展開をしている。このダイナミックな価値の動きの中から、ソーシャル・ワークの自己変革のエネルギーが生まれていると考えられるのである。以上述べたソーシャル・ワークの価値ヒエラルキーを図式すると次の様になる。



これらの価値は決して相互に排他的ではない、三段の価値は相互に関連し、交流運動を持つ事によって各々の価値自体が変革されるばかりか、ソーシャル・ワークのエネルギーの拡大再生産にも貢献する。すなわち、クライアントに向けての価値はワーカーの価値に可逆的に影響を与え、同時にワーカー自身の価値は社会に向けての価値に深い影響を及ぼす。この逆に社会の悪しき慣行の存在に対処するワーカーは価値表現、価値内容を更に深化、強化するであろうし、この変化はクライアントに向けての価値表現を変化させるであろう。この様にソーシャル・ワークの価値は、ヒエラルキーによって構成され、内部では互にダイナミックな運動を続けているのである。このダイナミズムの中に、ソーシャル・ワークの価値の存在意義があるのである。以上の様な価値の概括理解は、雑多に平列化されたソーシャル・ワークの価値を実質的に体系づけるであろうし、整合性を持たせるの

であろう。更にソーシャル・ワークの価値の容易な理解と、ソーシャル・ワークの実践に実質的に貢献するであろうと考えられるのである。

## 5. 帰 結

ソーシャル・ワークが社会的な機能に支障を来たしたクライアントや集団に対して、社会に受け入れられる正当な機能の回復の為の援助を行ない、且つ社会的機能の適応に努める為めには、社会的に許容される確固とした価値の伴った実践活動が必要となる。更に価値はソーシャル・ワークの理念、目標、実践方法、知識の応用等、具体的形態を持って表出するものである。この様にソーシャル・ワークの存在に極めて重要な価値は、その内容に於て多種多様であり、どの様に包括理解するか、は一つの課題である。社会、文化の多様化に伴って個人、集団の価値は多様化するばかりか、一方でそれらの価値は相互に葛藤を示している。価値の葛藤自体は、相反する価値の深化につながるであろうから、許容出来るものである。しかし、実践の場に於ける具体的価値の葛藤は、現場のワーカーの混乱と自信の喪失をいたずらに深めるだけである。この葛藤からの脱却は新たな価値の導入、即ち共存 (both-and)、真摯な相互コミュニケーション、バランス等だけでは済まされない。それはこれらの価値が他価値と同様に平列に扱われるからであろう。平列に扱われる限り、互の真摯なコミュニケーションは非常にむずかしくなる。この事を考える時、Compton (1975) が指摘する価値のヒエラルキーを取り入れる必要がある。Compton の場合は抽象と具体と云う形で価値ヒエラルキーが構成されている。しかしソーシャル・ワーカーが主体となってソーシャル・ワークが存在していると発想する時、ソーシャル・ワークの価値の中心はソーシャル・ワーカー自身のワーカーとしての価値に到るであろう。この専門職ワーカーとしての価値が、形態を変えてクライアントに向けられ、時には社会に向けられて作用すると理解出来る。この様に価値をヒエラルキー化して理解すると、ソーシャル・ワークの多様な価値は一つの流れの中で整合するのである。ヒエラルキーによって整合された価値は決して静的に存在して配列されているのではなく相互作用のダイナミックな動きの中で意味を持つ。ここにソーシャル・ワークのエネルギーの源が存在するであろう。このヒエラルキーは実践に携るワーカーに原点である価値の全体的理解を容易にし、ワーカーとしての意識と連帯を更に深めて行くであろうと思われる。

## 参 考 文 献

- Biestek, P. F. (1967) "Basic Values in Social Work" in Morton Teicher, et al., Values in Social Work (New York : National Association of Social Workers).
- Bower, S. (1967) used the phrase "both-and," as reported by Siporin, M. in Introduction to Social Work Practice (New York : Macmillan Publishing Co., 1975).
- Boehm, W. W. (1958) "The Nature of Social Work," Social Work. Vol. 3, No. 2 (April) pp. 10 ~18. also in Weinberger (高沢訳) 社会福祉の展望 (下巻) (東京 : ミネルヴァ書房, 1976, pp. 8~25).
- Brieland, D. and Costin, B. L. (1975) Contemporary Social Work : An Introduction to Social Work and Social Welfare. New York : McGraw-Hill Book Company.
- Compton, R. B. and Galaway, B. (1975) Social Work Process. Homewood, Ill. : The Dorsey Press.
- Dumont, M. (1968) The Absurd Healer. New York : Viking Press.
- Friedlander, A. W.(ed) (1958) Concepts and Methods of Social Work. Englewood Cliffs : Prentice-Hall, Inc..
- Goldenstein, H. (1974) Social Work Practice : A Unitary Approach. Columbia, S. C. : University of South Carolina Press.
- Gordon, W. E. (1965) "Toward a Social Work Frame of Reference." Journal of Education for Social Work 1 (Fall) : pp. 19~26.
- Gouldner, W. A. (1962) "Anti-Minotaur : The Myth of a Value-Free Sociology," Social Problems, 9 : pp. 199~213.
- Hamilton, G. (1951) Theory and Practice of Social Work. New York : Columbia University Press.
- Kohn, L. M. (1963) "Social Class and Parent-Child Relation ship : an Interpretation." in Loewenberg (1977) Fundamentals of Social Intervention (New York : Columbia University Press.).
- Loewenberg, M. F. (1977) Fundamentals of Social Intervention. New York : Columbia University Press.
- 松原一郎 (1979) 第57回日本福祉学会口頭発表レジメ。於名古屋, 日本福祉大学。
- McLeod, L. D. and Meyer, J. H. (1967) "A Study of the Values of Social Workers" in Siporin (1975) Introduction to Social Work Practice (New York : Macmillan Publishing Co.,) p.69.
- National Association of Social Workers (1971) "Code of Ethics," Encyclopedia of Social Work. New York : NASW.
- 大塚達雄 (編) (1978) 社会福祉の専門技術. 東京 : ミネルヴァ書房。
- Parsons, T. (1960) Structure and Process in Modern Society. New York : Free Press.
- Petters, E. D. (1971) Supervision in Social Work. London : George Allen & Unwin Ltd..
- Pinker, R. (1971) Social Theory and Social Policy. London : Heineman.
- Pumphry, W. M. (1959) The Teaching of Values and Ethics in Social Work Education. New York : Council on Social Work Education.
- Reid, J. W. and Epstein, L. (1972) Task Centered Casework. New York : Columbia University

Press.

Rockeach, M. (1968) "A Theory of Organization and Culture Within Value-Attitude System." *Journal of Social Issue*, 24(1) : pp. 13~33.

重田信一（編）（1971）社会福祉の方法，東京：川島書店。

Siporin, M. (1975) *Introduction to Social Work Practicc*. New York : Macmillan Publishing Co.

Webster's New Collegiate Dictionary (1973). Springfield, Mass : C & C Merriam Co.

ワインバーガー（小松源助訳）（1976）社会福祉の展望（上巻・下巻）。東京ミネラヴァ書房。

Wilensky, L. H. and Lebeaux, N. C. (1965) *Industrial Society and Social Welfare*. New York : Free Press.

Williams, M. R. (1967) "Individual and Group Values. *The Annals* 371 : pp. 20~37. in Loewenberg (1977), p. 32.

吉沢英子（編）（1979）ソーシャル・ワークの基礎，東京：相川書房。

ヤングハスバンド（小島蓉子訳）（1975）社会福祉と価値，東京：誠信書房。